

倭訓栞中編

奴尔部
祢乃。十八

和書門類			
三六七三	三	三	三
一三三	函	三	三
三四	架	三	三
六四	册	三	三

内閣文庫			
三六七三	三	三	三
一三三	函	三	三
三四	架	三	三
六四	册	三	三

内閣文庫			
番號	和 36723		
册數	64 (52)		
函號	263	7	



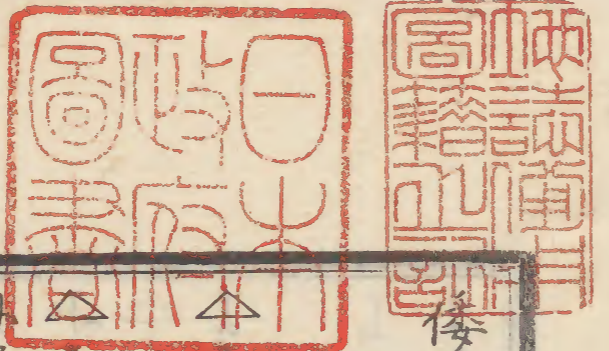
A 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





倭訓栞中編卷之十八

洞津 谷川士清纂

余の部

虞伯生ハ唐音ト唱一也叢林のよみ

セあり

よりのツ

和名抄ハ乳酪ハより乳ハ呉音ト也

みろん

柔ハ吳音ト多柔軟の音ありよりハ柔和ト軟

ハぜんの音あり漢秋氏の後をんとよみありトセるト誤ト

△小切

漢氏小切のよみト名え蜻蛉月記トも名えあり

二階トあり類聚雜要ト同なり○棲ハトも義同○二階

崔氏ハ孫原行政の後ト

ふがて

苦手の義ヲ樞ト凡苦手毒為事善傷者可使按

積抑痺ト名え多り○蛇ヲ捕ト蟠テ動ト者ハ苦手也

い

ふぎりか 極暑の時陸は近き所あり湖の味変て苦

くある候ふあり臭多くあがきり

よかけ 信濃輕井沢の辺にて温鮎の下小竹子大根取乃付

法物取敷く汁はたれみそは月ひくかきふせ食すはよみ志つや

のやー○輕井沢ハ鴨集沢あり

△ふぎび 石葉集ハ柔備とちりふぎぢふ意あり

よきび 粉刺はし丹黍の兼ふ和名抄ハは座はあきみ

よあり

ふぎふ 握はあり拳も同古事記ハ楹とよあり○弓

よ少ぎりとよハ地あり

よぎたづ 伊豫国温泉郡ハある日本紀ハ熟田津石湯行宮

とるえ多り萬葉集小人麻呂の石見の海ハある今渡津と

よあり近邊ハ田津村とあり

よぎハ和 祝詞式ハ和稻荒稻とるえ多り和稻ハ米ハ志

よきみむか 倭名抄ハ鼈鼻は訓せり今ハ若樞鼻の半
あり

よぎりそぎり 拳取ハ握小節の義あり

△よぐろつとろ 東大寺ハある羅索院ハ俗ハ二月堂と叫り

側ハ関伽井あり修法の用ハ元とよ

よくさび 八雲御抄ハ舟荷ハかくさおありとる由荷櫓乃

義ハるあは積付ハ管筵とよそ竹沢ふちとよて部とよとを

里小舟は波よけとよ

よぐろふ 棧車ハハ輜重も同荷車乃義

よぐろふ 氏姓小叙迦牟尼佛ハよみ事あり如來部は義

あつとつとつ丹波人の氏あり

よくさび 徒然草ハわやうさけあり人ハあり悪相ハ気味義

よくげとは少異れり今もあきとよ

小ぐらろ免 者黒の義鳥金沢よりあり

△小げわどびり 日本紀小道代よりあり

△小こげ 毳代よりあり和毛の義之史より先肢とも云えり又編代よりあり和名抄にはふ甲けともあり

ふこくは 柔草あり後にいふあぶら葉集

葦垣法中のふこくはとやふ我とあして人ふあつるれ藻塩草は一種の草といふ貝原氏翁根草ありといふ

わらひ石蔵ありといふ

小こずみ 延喜式小和炭と云えり今よりけりずみあり

物類相感志より浮炭と云えり

小こやがーた 古本紀のふらうも和やうのまありといふやが

あつとやがづりこを省けりたりやがたさやといふが如

小ぐらぬまへ 源氏より流李濁世乃意なり

△よーめ 庭訓より煮湯とあり

よーか 姓より仁科とも義久官軍の將小仁科盛遠あり

義仲の將より仁科守弘あり東鑑より仁科御厨とも竹濃安曇郡は大町道辺の地名仁科といふ

よトむ 丹條の義之といふ又鈍條ともあり

よ志申 金ふ二朱といふハ拾芥抄より六銖為一分四分爲二兩と云えて今を兩といふハ金四分が一分とて一分もその刻より一分は四朱といふたるとその半分がわれと二朱といふあぶら甲州金

ハ信玄より起る是も一兩四分の刻より一分のかけめ一ぬあり二朱ハ五分あり

よあう 職人を合うるも尼元之義比丘尼ともあり比丘

尼はなると護念寺にあり禪家より名同ありし

よーびき 日中行事より大くると西むきよやうたすなり

いふと云えり

よーがハ 古今集より法皇西川よりおはりまゝりつる時と云る軌

永御説より即犬井ありと云

催馬楽より西寺に老孫すみまら孫すみとも東寺の西三町あり古蹟あり金堂塔下等是也世より古尾あり

北山抄より西の道とも西海道に云り日本紀

西海の品は厚味とするはとも西看と称

○奥羽佐越等は北海は魚を肥大する味凍に振泉搗備等の江海の魚は堅小く味濃なり是困勞すると安遊ありとの異あり北海とて鮭鱒の如きは其味美ありは長江に許て困勞するが故なり鯉魚と淀河はとも云とするも舟車小船く急湍小困むる故に五雜俎より凡魚乃游皆逆氷而上雖至細之鱗遇大水亦搶而上鳥之飛亦多逆風蓋逆則其鱗羽順く則返逆矣人之生於困苦而死於安樂亦犹是也と云るあり

西宮あり根津国より八廣田社の内にて蛭子乃

舟西宮より着りよりある武庫郡西宮郷に○西宮左大臣ハ醍醐帝法皇子源高明也著まるところ西宮記あり重明親王と史部王記ありて御兄弟とも博識左方の人

西狩の字左傳より後鳥羽院西狩の後ハ朝憲より廢れ武臣恣あるる多かり正應の比龜山上皇より盟各代貞時より賜り正中には吉野先主告文にありて高時より下るる是代龜山法古き跡に引くを房卿やんと奏せられとも恐むある恥辱ありし

稱徳紀欽恒の欽とも○西京の義朱雀道より西沢より古京又長安あり是あり○東の方と赤のみやことり左京と洛陽と云是く色より紅葉はとも鷹の爪はとも名づけり

△よたろ 天和二年法法令より農工商の輩より二刀佩代禁

す階開皇十六年勅使工商不得仕朝進使と均同

△よはき 氏小仁朱氏あり足利家の枝裔也とす

伊勢は長野小住す○日記もあり

よつき 日給とありその事八日中行事ふとす上日の

事あり

△よちかん 鑑真傳ふ或漂日南と通鑑集覽日南ハ

本秦象郡也とあり

よちやく 粘着の粘音ありとすとちやくともとす

△よつた 今新田にあり和名抄は上野五の郡名新田

ハ小ふととあり万葉集よあひと山ととるひびとと

たふと音通とて合掌甲冑ありの例とす

羽せり詩話三歳日新田とるなり○新田大明神ハ武藏

国荏原郡矢口村にあり○今の村名よ入田とす

も新田あり

△よちり 仁和寺にあり河内茨田郡の村名とす

よあひ 水汲汲てよあふ桶にり琉球よ丹桶とす

△よぬき 飯沢水多く入てたき其湯汁に取用し蕙枝の

義ありお祈をも同

よぬりのや 古事記小丹塗矢とるなり大己貴命の故事

あり又山城風土記賀茂の明神は故事とすこの西土竹

王初の記事小あり

△よのむら 一宮二宮とて住ふありし尾少二宮古へ盛あり

針とす地ハ

勅使宿館の禰あり御休とす安楽田村の道の北に在る

より西よ二の鳥居の禰あり是近四至の内とるなり一の鳥

居の禰ハ青塚ふあり二宮よりハ三十町とあり是遠四至と

よのまひ 安摩とてげうしと舞ありて其次の舞ハ二の舞

とすとすの袂衣ふかこれみの中納言の二の舞よやあり

とあり又世継物語徒然草ふんえ平家物語は頼朝の範頼
よつとまゝ語小卿とまゝと九郎小継と二の舞はせん者也と
るえ常花物語小末世の朝妻二の舞をふしとる色今の俗語
よあとの舞といふも又同

△よつた庭田とあり前庭ふ近き田代といふことあり

よハコ庭子の義農家とて奴婢夫妻とありて出生志
とる者代其家仕つてはひふ家子の極端なり

よハハ事決不定あるはひふ二半の義ことあり

よハのり馬よつと場騎の義

よむめ源氏よびはきのおむえる紙とる色のお
ありたるはひふとつと鈍色の意あり

よハこぶ庭瘤の義千歩峯ことあり

よハむせ庭も狭小れ義ことあり

よハちや庭柱とあり年貢は祓ことあり

よハうはど南都正月の賀客庭竈の説は逢つては謝す南
都富家貧戸別家家の入口ある庭小圍爐裡はかまへ福

らあつて置とる家の主婦とてよびく拜年の客ははすひふ

は必ひらけ無く賀客案内すれば請へる家の妻雑煮は

餐をくらよけ謝するあり續紀は神祇官奏庭火御竈四時

祭祀永為常例とある意くとる由

よハ妹おも庭面の義西土は庭心といふ

よハうあえ驟雨はよあり急雨あり

△よひせ和名抄備中国の々名は庭妹はよありふひハハの

轉せし日本紀よるははよあり意とや又式は妹はよめれと妹ハ

誤字とや

よひ貞観儀式は新日とみえあり

よびり仁賢紀は熟皮はよありハ三幹語ありしは

ハハソク

よひや 横津必鳥下郡新屋坐天照御魂神社三坐る也一坐ハ西河原村あり一坐ハ福井村あり一坐ハ上河原村ありて天照大神と稱ふはもと饒速日命ありし

よひた 上野陸奥郡名小新田とも今よつたてりり万葉集の子尔比多夜麻も小新田山とてりり和名抄ふあふたともる也今村名よ入田と稱は是ありし越中の郡名新川也とみよがはくとあり

よひむろ 日本紀は縦賞新室沢よひむろあそびとあり〇常陸五の民家よ新造の付小屋根裡の四隅小藁とて男根女根沢造り懸置とてあり

よひのみ 所の名氏姓あり小新家とてりり日本紀よんえあり和名抄よ讚岐阿野郡新居沢よひのこともあり
よひまわり 後撰集河去よる也新桑の義あり
よひくさき 万葉集よる也新桑蘭の義あり

よひさきとり 萬葉集よ新防人とも

△よふだう 入道と云僧ありあり異邦のちよ六道士よありたりあり

よふね 荷船の義呉都諸山記よ行李船とも今皆石敷河とて名守五雜俎よ十石舟大学衍義補も造一十石舟とるえり

よふむい 四時纂要よ閩人以立夏後逢庚日為入梅芒種後逢壬日為出梅とるえり

△よへの 贄野とてりり蜻蛉日記よる也綴喜郡多賀村の西南よありて今猶贄沢とる

よへの 贄殿とてりり奠鳥料理の間て贄殿別當とてハ其所奉行也とてりり拾芥抄よ藏人頭大守及法より進子御贄沢納りてるえり朝野群載よ内贄殿と

よへたう 東鑑鷹狩停止の條よ但神社供稅贄鷹事者非

神御贄鷹者被免之とるる也巢おろし紙ゆみ定家々

又平人の物ふ午未の日代除くハすハの御物小引ひよさせしる

日あり又紫色の漿束と贄鷹をわりの定家々

又吉備津宮よありしや定家々

志金う吉備津市神は贄鷹や諏訪の法代より今かた

前の法おびく笏立石といふ石ふ笏立置き荒野岸森を火取

より由貴の御饌は供進すといふ神前山は村の向ふの山船渡

あり神前社ハ荒前比賣命也とす

よわんぎのほが祓 順徳院美久御説よ一條院の作よ式部

ハ日本紀にこそよとるるけきとつりしふゆりの内侍とら

この作次始とて日本紀乃といひしやたきしとて又河海

抄ハ大般若の料紙に請て先須大明石の両巻に書るり

あり経のうらふとといふハの考へ

よわやう 丈選よ芬芳はありよわひやうも同

よわひのきぬ 色紙をといふ紅梅蘇芳をといふ

よわひぶくろ 唐韻よ幃香囊也とるる類聚雜要よ以香囊

懸帳前簾釣とるるあり神よはるる神陸といふ

神御贄鷹者被免之とるる也巢おろし紙ゆみ定家々

又平人の物ふ午未の日代除くハすハの御物小引ひよさせしる

日あり又紫色の漿束と贄鷹をわりの定家々

又吉備津宮よありしや定家々

志金う吉備津市神は贄鷹や諏訪の法代より今かた

前の法おびく笏立石といふ石ふ笏立置き荒野岸森を火取

より由貴の御饌は供進すといふ神前山は村の向ふの山船渡

あり神前社ハ荒前比賣命也とす

よわんぎのほが祓 順徳院美久御説よ一條院の作よ式部

ハ日本紀にこそよとるるけきとつりしふゆりの内侍とら

この作次始とて日本紀乃といひしやたきしとて又河海

抄ハ大般若の料紙に請て先須大明石の両巻に書るり

あり経のうらふとといふハの考へ

よわやう 丈選よ芬芳はありよわひやうも同

よわひのきぬ 色紙をといふ紅梅蘇芳をといふ

よわひぶくろ 唐韻よ幃香囊也とるる類聚雜要よ以香囊

懸帳前簾釣とるるあり神よはるる神陸といふ

△よやす 令者の音こ

△よぶら 如法の音官府語こ○如法經よりハ法華經或ハ

三部經作法して如法は書寫する代りつゝとは園仁より始り

る元亨釈書より

よよらり 饒子とちり三議「統」より

よよちや 徒然草より女子生あり〜女姓よハあり〜女生ハ

沢んかのむすれの意或ハ女姓と守小童沢小姓といふこと

△よらり 飢びりらりるあり 臈沢ありきもの云も同

〇滓沢よむも義同

よらり 悲生とかけり土佐の山中あり 葛橋と云あり赤り

葛沢より他なる橋長さ二町程在赤り葛ハ他所ありきものあり

藤よ似く大さ〜とりの妻のみ〜赤〜故よ名〜人沢渡時

所の山人杯往來此人沢背横負腰よ杖をさ〜渡るあり此葛橋

ハ大木の根よ行桁沢まれ付一尺許よ横木沢申ひ付〜この如く

しく同葛檻干よ他るま〜と葛故左右へ開く〜往來抱め
るありが〜此奥函谷在む〜平家一敷逃げ陰れ〜所あり今
よ天皇山在安恒天皇隠れま〜所小松氏の人あり小松大匠の
事あり平家法赤旗神神よ〜ある宮あり能登守の末葉とあ
り阿波の界あり

△よるべきころのらみ 源氏より遊仙窟よ氣調如兄崔季珪之
小妹とんえあり

ぬきぐりー 東鑑に抽櫛ととも刺櫛とあり

ぬきかすり 和名抄に羅車にありり多武後不著る物と云

ぬきみきり 聖緯蒙の義ありし新撰字鏡にぬきみきり云とあり

△ぬぐり 貫乱の義ありの白玉浴の白玉かきとあり

ぬくわ 氏姓に温井にありり俗に温ゆるにぬくありと云

ぬくふ 美法温氣にぬくはくありと云ぬつらりと云俗語も同き

ぬくひり 拭拭にありり脱の意あり

ぬくつ 粉牌にありり脱版の義あり

ぬくつ 遠く浮つる舟にありり王喬の故事ありと云

ぬけふ

△ぬけふ 脱るる義私に外に商賣するにありり○明の法に

軍器に多く海にゆる者後すく我國法亦同

ぬけみち 竇路にあり

ぬけがし 脱殻あり蟬蛻蛇蛻の類にあり

△ぬい 日本紀に虹にありりトと通せり石葉集にも

努自とありり作濃とてのトとあり

△ぬすもむ 鷹のさうたふも代やぐり食草也とあり

ぬすもむもの 日本紀に賊にありり

△ぬのおび 和名抄に白布帯にありり

ぬのおびき 秘抄に布引の目と云るありり中右記に詳に云

セリ今法頸引の目と云り○たけのあふ云玉草こととあり

布引と云る如くは云○布引の勝は格はありり兔原郡生田川の

水上布引に伊勢あり安濃郡伊賀の界又近江又信濃にあり

△ぬこれ 物よぬと云色伏てと云えあり

△ぬいどの 禁中より縫殿と云くぬいどのとありり和名抄

に縫殿寮ぬいどのと云はと云む

△ぬきま 沼田あり常一水のけきたる田也

△ぬりすのこ 延喜式小駄鈴傳符皆納漆籬子と云えあり

ぬりおろふ 新撰字鏡に慢覆状とあり 莊嚴之貞也註

あり

△ぬるむ 常一湯湯よひふるまふあり 温字の意あり

浮舟小舟身をぬるまきと云えあり

ぬるく 万葉集よもよあり 滑るるあり ○滑るる

て圓形赤豆とて煮るる状なり

ぬるまき 伊勢物語ぬるまき人よきせまくんといふ

は濡有の義往める云めるの状也 ○ぬるむ状なり ぬるむあり

ぬるが糸 眼目科口齒科をよ用る 焼釜の状とて熱師ふ

漬し熱よ乗て用るあり

倭訓栞中編卷之十八

倭訓栞中編卷之十八

洞津 谷川士清纂

糸の部

△糸うと 饒磁とあり茶碗の状とあり

糸うねつ 饒舌の轉音ありとあり

ねくそち 饒鉸とあり 佛器あり 庭訓に饒鉸ふ似糸

ハ饒と御と二物あり

△糸がひのいと 七夕よ五色の糸状なり かけて糸向ておまひ

法ほとを祈るありとあり 乞巧奠あり 糸向る糸ともよ

あり

△糸ぎこと 祈事の義あり 古今源氏と云えあり

糸ぎくくは 祈懸るの義なり 拾遺集よひる法社法申ふ

たすきとんえあり 本説たすきは糸宣のかけたるものおれと

あり

△寝真の美食物也寝腐ともも通つる金葉集

集

△近江より有りあるかれ飯山より六つとるりんと稱ぐさり
△紀州の根集寺あり覺錢の関基あり豊大閣是代
屠る○世ふ膳椀の敷ふ稱ぐらと稱する此寺より始りしる
一しと六時代らるき然り新とふするも稱ぐらぬりあど
いふり

稱こぜ 亀背代り猫背と訓せり

稱こぶき 船の眉公雜字は猫籬とるえり

稱こおとて 新撰字鏡は頷代より短面と注せり

稱こおろり 平家物語もも猫の者代陰抄す代云あり

△寐覚肉の義九月代り

△根白草の義芥代りよし藏玉集ふるえる

里俊頼

せとちの波こそ花は根白草にび我社ふるえるりつ

△鷹爪鈴代はるが然然り音助緒の義こい

了

稱ずかき 兼四の義松系密は雀の子稱ずかきするよふと

里くととり白鼠の名代伸とり一抱朴子よるえり

鳴きあるり

稱ずかげ 和名抄は雖代り兼名の義あり又泥駝代

訓せり

稱ずみりり 原色是とり中古は鈍色といひふふ葉深衣

とりは是あり

稱ずみのちりり 叡山の麓あり三井寺の僧頼豪代あり

といひ傳り

稱すり称ころも 紫の稱すりの衣とより紫根代くたそて

深るものちれハりとり○高陽院寺は旅人は稱すりの

ころもとよめるが判者難だといひてせざるはかばつるや
こそ秘すり云といふも是より知るるや

△秘なる 埋怨の意より秘せられたるも音垂の意にて
言語代もくつや或は國頼代訓なり

△秘ぢくひ 義仲粟津の戦ひ東兵内田家吉自カ六十八
代兼といふ也其首代切て出といひ小田原北條家臣は流り
そなたらといふものハ強カ也遠州戰場にて敵兵は捨首少志
とつとて捨首は右方なりと人呼り又氏直の前にて鹿乃籠
二本代合せて押あつり其母ハ米三俵はけとる牛の谷に轉ひ
あつるが如く擧げとる

△秘つては 俗お土の秘つり堅く色黒き沢より涅槃の音を
るし

△秘つりぢひ 鷹の鳥が捕く後赤よゆりて何れといふ言
雲集集へんえんり

△秘あゝぢは 無根草の義あり今といふものハ佛甲草あり千
載集よ

明日あゝぬみむらね岩の根をいふをふあぢ世ふ生初めん
秘あゝ 農家小稲の水早よ遠て穂の如き代り根無の義
しや

秘あゝぢぢ 根無草あり奥の地名あり
秘あゝぢぢぢ 古歌り

鷲鳥法堂よつげも何れす秘あゝぢぢぢとちて安射とぬ
秘あゝハ無鏝也とちや繭あり

△秘のゐ 姓ハ根井とちり盛衰記ハ根井行親あり佐藤
佐久郡の人あり

△秘とん 涅槃とちり四経の注ハ涅槃の不生不死之地ハ
切修行之所世人誤以為死大非也といえんり

△秘びれて 寐をれたるがく又秘おびまの略集し

△移す 新撰字鏡に鑷又鉞にあり○神代紀に傳

田代移ぬせるとあり

移ぶら 竹根の細く節うちあるに以て鞭策とすべきあり

○貝の名もなり

移ぶと 痛に以て根大のまを在るに以て移とす今の俗便

毒に以て移とす也出舟にては痛に以て移とす

△移まき 被代に心字彙に寝衣と注せり

△移みよみぢ 俗諺あり草菴集俳諧哥ふ

みよみぢの移たの移つりけり井よ耳も驚く水の音に

△移んささ 年三と出くかくも心し西五九月の移り

長齋經に修年三齋戒すといえあり○年星八後撰集に

く申命属星代祭り拾芥抄に

移んず 俗ふりり事代に醫書に申むり代移んすを

病とありといふ塩囊抄にええあり忍の音移ありし

移んぞん 和國抄に場始ふ念人とて笠懸に射手と念人

と代ありたると東鑑にええあり競馬相撲ふといひ

の人情意あり念者といふも意なり

移んきふ 年給あり院宮に公卿に毎年の給に

移んかき 根もかきりや移んあり早うつとをといふ倍は無

念と音よといふ別あり

移んころ 元録中の兎戯に釘代地よ赤きく遊ぶに

珠釘の戯是なりや又投壺の遊やともなり

移んさやし 年移年とあり大学衍義補に以て排年と

△移やいぎぬ 延喜式に粘縮といえあり

△移くひぢり 夏の物に以ていつり照射に同

移りこ 練粉の兼官方はちのり

△移りころ 系よみ大双紙にち練操の義あり

新り

練あり練緯の畧あり

新りうき

拾遺集物名も木練の柿沢よりや

新りおとこ

梁莖鈔小練男と見えたり古沢新り代りあり

七日の節會は近湯友人七夜庭代廻るるありと云ふ

新りひむら

毛沢するや雀の事あり古七月の比あり尾羽

そらひて四季よかきくは新りかひむらといひ尾の一夜は

る沢おんたうひむらといふ○新り志を新りやどるといふ

毛沢する沢より八月は結るるありかきくはと云ふ尾羽といふ

毛沢かぬ沢より皆鷹の辞ありおの鳥よ此名ありと云ふ

新り

鍛錬の義あり鍛煉も同し

新りきたる

練進むあり建武年中行事と云ふ

△新りや新り

木の枝沢練の如くより新りあり沢結沢練

里をくくるといふ後拾遺集ふみ山木沢新りそをてをて

是あり新古帖よかきわの新りそともををあり倍ふ新りとも
と云ふ○常より六練麻の義あり

倭訓栞中編卷之十八

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

倭訓栞中編卷之十八

洞津 谷川士清纂

乃の部

△のあひは 俗語あり野間の義あり

△のうす 野畑の馬ウなり ○似馬而小なる一種の馬なり

形牛のめり ○塵埃とるるハ野にハかけろ之ウ莊子ウなり

のろおよ 能書の字西土の書よるんあり

のろまん 埃囊抄ウ暖簾とかけりはとく暖ウ帘ウありし門帘

かゝるゝありのろハるんの音ウなり ○人の氣象ウたるといハ

楊外菴集ウ諺ウ所謂軟纏也といふめし

△のがみ 美濃の野上ハ天武紀ウも美葉集ウも雲たつ野上

のろととも長身ウあき津ウのあウ野ウ上ウともあれし野ウのろ

み姓方ウなり

△のきウまウけ 和名抄ウ槐ウなりウ漢語抄ウ棉ウ招ウなりウ

のきそものうえ 名はゆきとものこ経あり一北野の柿をふ

あり六辨毒也一誓願寺の側あり小川梅あり一相玉寺
の子院あり千葉為紅あるもの是真あり六辨梅は六退

葉の義ありとつり

△のこぎり 鋸はりのやぎり法あり全浙兵制一鋸子と

るえり西ありてのこぎりひあふてのこぎりといふのぼせ
きりあり

のぐろ 野心の義鷹のまつねはつり

のこぎりくづ 鋸屑はりあり蘇軾詩一高論無窮如鋸

屑

のこり志孫 和名抄一結はりあり米は春て漬たす残つた

はつり

△のさハ 野沢の義あり○白峯縁起曰奏崩御之由於京

待報之間奉浸玉骸於野澤井と白峯八讚岐阿波郡あり崇

徳院は葬奉つて野沢あり野沢井はやそ水といふ近き比
安殿水と勅賜あり今寺ありて摩尼珠院といふ

のさハ 野はさハはまてゝ 觸體はつり眼科は天石といふ

○享保の初夏妙南半田村の農民古塚はあきり一三尺四寸の鉄

よて上齒四十五枚下齒二十六枚齒幅ちち四方ありといふ

のざれたう 藻塩草は秋過るあつたりたる鷹といふ野

晒の義ありし又まふふくありたる山さきといふやあり

すべく大鷹の事ありといふ○俗ふ人死罵てのざれものといふ

も此義あり

△のーはがさ 栗路野鳶が前とる葉集一そのち法を

とと皆法は属すといふ

△のす 載はも伸はといふ

のすぢ 野筋あり益といふ

△のぞかへり 鷹よといふて反けに規ける義

△のぞめごと 平家物語よ磨墨八川中より菟築形よ押泳
まことそえあり

△のち法よ 後世あり釈教よよ六未來の義こ
のち法ありた 後朝ありまふり六逢ての習熟だつり

△のぼり 俗よ自然の石面だつり野面の義ありし
のつけ 仰字意くのほけよそるあつり平家物語よ

けふ突倒すそえあり
の法とり 日本紀のふふるお町つ鳥あり雉子の枕辞おつ

つ六助語あり古事記よまのつとりとそるさハ祭語よ万葉集よ
まのつるとのそつりも雉あり

のづらさ 野の高き野だつり集へし
△ので 野寺法義山寺とつらめり西京よ野寺町ありの

拾芥抄よ野寺ハ常住住寺ハ柏原よありとそる梶原の邊ありし
△のぞと 喉輪の義鑑よつり今ハ用ひすと

のどよび 萬葉集よぬ志鳥ののどよび居とよあり今喉

のどくび 夢とつらめり
のどくび 詩経よ胡戎あり

のど免て 源氏物語よ相機の裁縫るだのど免てとえそ
ま又のぞめごとそそる也

のここびと 獵師とつり野床人の義ありし
△の 児女子の語よ佛だ又日月だそものそと

祖母だ祐す 東国ととそる僧だつり越前と父だ祐上はと

の免く 古事記よみろ人皆のめと感しそえあり
つはら 建武年中行るよそ武部者だつりの法はか

△のむら 野袴と後世の制ありし奴袴とハあそ
△のびす 新撰字鏡よ嘸呻だあり

のびる

古事記の故も日本記にほのおひるつゝとあり

野蒜の義小蒜也と云り和名抄よこひる又おひるとあり加

賀は福んぶりと云り野必大和名抄の沢蒜延びると云是と

と云り

のびすん

新伊西波你亜びん此国ハ歐羅巴の伊西把尔亜

より新とよ取れ一國あり日本の下よあつゝあふて甚と云

と云り

のびけつきド

雉のま子のためつをき水よひとて野

大沢消つこと云り

△のふ

和名抄よ衲びとあり音あり柶葉あふのふはけと

と云えより補綴と注すあり

のぶぐ

野方岡の转音ありと云り倍語あり

△のべがみ

録こと云り

のべがみ

延紙と云り柔紙とも云り

のべはは 野馬の義莊子よと云り陽焰びん

のべのけうり

多く無常の煙を云り

△のぼりむ

柶びんと云り

のぶりてのよ

上古びん云保氏小云えより上代と云意あり

のぶらみ

昇霞之崩御びんと云り昇るを云と云

△のみこび

會得びん云吞籠の義あり

のみねえ

新撰字鏡よ鏡びんとあり鑿柄木と云

のみぐち

のめ法口乃義ありのめハ船と云

△のんぶぎ

和名抄よ眩びんとあり喉笛の義

△のとり

野沢守人びん

のとりみ

先仁紀の記よえよりきれとなのとりみ

多字錯置セリ

多字錯置セリ

△のやふ山野とちてかくよむハ繩墨ハすまかひとよむやく
 文字と語路の異あり
 △の〜秘こ 野猫之上総国とて山祢ことよみ伊吹山の辺とて人
 びたぶとせし物語あり夫木集
 まくす原下とひありとせし猫の香はまかたをまて妹と心
 倍小人ハ罵ての〜とよむ此意と或ハ間漢ハ訣せり
 △のりげ 鷹小ハ白き綿毛ことよみ
 のりもの 賭物の新うけ物と同一増後小碁の賭物は錢か
 ますく昔より乃り物うけ物皆強くと洗作とま〜とええ
 ころり○倍小轎ハのり物とよみ乗の義あり源氏小普賢がさ
 つのゆりとのとええより大白象ハのり観普賢経とよむと
 是の轎夫ハうごかきあり
 のりむす 新撰字鏡ハ騙ハのり今乗馬とよみ又騎ハと
 びのりるとよみ

のり〜さ 馬よ乗よ後ハのりハ搭連くとよみ
 乃りぬよハ 法場と釈教とよみ
 のりぬよみ 日本紀ハ今ハのり
 のりぬとつ 法水ハのり梵書ハとよみ
 のりぬとつ 延喜式ハ法別てとよみ天皇の宣命とて定免給入
 る法とよみ
 のりぬとつ 法華ありとよみ蓮花ありハのりぬとつ花とよみ
 てよめる、おぼつとよみ
 のりぬとつ 法流あり釈教とよみ
 のりぬとつ 法の車あり羊鹿牛これハのりぬとつ三の車とよみ
 佛法ハ譬ことよみ
 のりぬとつ 法皇ハのり
 △のりむ 川水の俄とよみとよみ引とよみ踏のありた〜
 動くぬり〜のりぬとよみ

